

言葉が伝えるもの

向こうから年配のオバチャンが近づいてくる。こっちを見ている。何か言いたげだ。道を訊きたいのだろう。やっぱり。目を合わせたまま真つ直ぐ近寄ってきた。

「すまんけど、背中、搔いてくれへんか」

「えっ、」一瞬我が耳を疑う。

「さつきから痒うてしゃあないねん」

既に半身になって、こっちに背中を向けている。頭の中は混乱したまま、薄いブラウスの上からひとしきり背中を搔いてあげると、

「おおきに、すっとしたわ。これからライトアップ見に行くねん。ほな、さいなら」
オバチャンはニコツと笑って去っていった。

これは実話である。夫の転勤に付いて、大阪にやってきて2年、東京で生まれ育った私には、未だに戸惑うことばかりだ。大阪の人は用があるうとなかろうと、やたら話しかけてくる。スーパーで魚の切り身を見ていると

「これどうやって料理すんねん？煮たらええんか？」

私は店のひとではない。

「大阪のひと、どう？」知りあいにも訊かれるたびに、私は少々の皮肉を込めて答えていた。

「すぐくフレンドリーだよ」

正直、鬱陶しいと思っていた大阪人のコミュニケーションだったが、最近はその中で、少し変わってきた。住んでいる集合住宅のエレベーターに乗り合わせた住人は、こちらが初対面であろうと、老若男女、必ず一言ある。

「こんにちは」「おおきに」「さいなら」

以前は、「エレベーターの中での無言に耐えられないのだろう」くらいに思っていたが、だんだんそれに馴染み、心地よく感じている自分がいた。「これが普通なのかも」と思い始めた。「慣れた」のではない。小さい頃の自分、昭和の時代を思い出してきたような気がする。言葉とは、なぜ何のために生まれたのだろう。今は時々、声に出して真似てみる。アクセントは違うのだろう。「さいなら」